古代日中の嘗祭
―天子宗廟祭祀と大嘗祭の祭儀比較―

高　夢雨

はじめに

日本では大嘗祭・新嘗祭・神嘗祭といった神への供膳を第一義とした嘗祭がある。その名称は『礼記』に記した天子・諸侯の宗廟で行う秋の時祭――「嘗」という字を借用したとされている。それについて、大嘗祭・新嘗祭は嘗祭の字を借用しただけで、祭祀そのものは日本独特の稲作信仰に根ざした行事であるとの見解[1]や、日本の嘗祭（九～十一月）は中国の秋の嘗祭（七～九月）とは季節が違うが、秋の祭りとしての意味を借用したとの見解[2]がある。しかしこれらの観点は、大嘗祭・新嘗祭は宗廟祭祀の中の祭名を取った原因を明示せず、宗廟祭祀との関係を論じていない。その問題に触れたのは建築的な研究であり、池浩三氏[3]や丸山茂氏[4]は大嘗宮・神嘉殿を中国の宗廟等と比較し、両者の建築様式とそこで行った儀礼の近似性を考察し、大嘗祭・新嘗祭と中国の宗廟祭祀との関連性を論じている。以上を踏まえ、本稿では大嘗祭・新嘗祭の名称の由来を再検討し、天皇の大嘗・新嘗と天子の嘗との祭儀比較を試み、両者の関係を考察したい。

一、大嘗・新嘗の由来と性格

1、『礼記』月令から見る嘗の意義

『礼記』には、天子・諸侯の宗廟における季節毎の時祭、月毎の薦新行事、大事に際し祖先に報告したり祈祷するための臨時の祭祀が見られる。『礼記』王制第五に「天子諸侯宗廟之祭、春曰レ礿、夏曰レ禘、秋曰レ嘗、冬曰レ烝」[5]と国君の宗廟祭祀の時祭の名称が記され、秋には嘗祭という。『礼記』に宗廟の祭祀行事の嘗に関する論説が多数あり、その中に「嘗新」が月令第六に、「大嘗」が祭統第二十五に一回ずつ現れている。月令第六に「嘗新」の他にも天子が関与する「嘗」が見られるので、纏めて見ていく。

①農乃登レ麦、天子乃以レ彘嘗レ麦、先薦二寢廟一。（孟夏四月）
②農乃登レ黍。是月也、天子乃以レ雛嘗レ黍、羞以二含桃一、先薦二寢廟一。（仲夏五月）
③是月也、農乃登レ穀、天子嘗レ新、先薦二寢廟一。（孟秋七月）
④天子乃難、以達二秋氣一。以レ犬嘗レ麻、先薦二寢廟一。（仲秋八月）
⑤是月也、大饗レ帝、嘗二犧牲一、告レ備二于天子一。（季秋九月）
⑥是月也、天子乃以レ犬嘗レ稲、先薦二寢廟一。（同上）
⑦是月也、命二漁師始一レ漁、天子親往、乃嘗レ魚、先薦二寢廟一。（季冬十二月）

①～④、⑥⑦は、月毎に天子の嘗の内容を記している。天子は当月の旬の食物を初めて食べるが、その前に必ずまず寢廟[6]に薦める。孟秋七月に農民は成熟した穀物（鄭玄註「黍稷之属」）を薦め、天子はその新穀を寢廟に捧げ自ら嘗することから、嘗新という。「新」は新穀の略語で、「嘗」は嘗麦、嘗黍、嘗麻、嘗稲、嘗魚の「嘗」と同じである。①～④、⑥⑦に示した、天子が新穀等を宗廟の祖先に捧げ、また自ら嘗するという嘗の行事は、宗廟の毎月の薦新行事に当たる[7]。天皇が新穀を自ら嘗する前にまず皇祖神に捧げるという新嘗の形態は天子の嘗新と共通し、文法的にも通じる（日本語の文法では「嘗新」は「新嘗」になる）ので、新嘗祭の名称は『礼記』の「嘗新」に由来すると考えられる。

⑤の嘗について、胡平生・張萌訳注本（中華書局、二〇一七）や新釈漢文大系本（明治書院、一九七一）の『礼記』では、宗廟の秋の嘗祭を指すとし、「嘗」と「犧牲」の間に句読を切り、明堂で五帝をはじめ全ての天神を饗応し、宗廟で嘗祭を行い、犧牲がよく準備できたことを天子に報告すると解釈している。

時祭の時間について、後漢以降は四孟月に行うことが明確に

規定されるようになったが、[8]『礼記』にはそれが明確されておらず、孟月か仲月或いは限定されないといった説がある。[9]そう見れば⑤の嘗は孟月の行事ではないにもかかわらず、時祭である可能性がある。しかしそうであれば、なぜ月令では他の時祭は記さず、嘗祭のみを特別に記すのかという疑問が生じる。

鄭玄は⑤の嘗について「嘗二犧牲一、告レ備二于天子一。嘗者、謂レ嘗二群神一也。天子親嘗レ帝、使二有司祭一於群神一、礼畢而告焉」（『礼記注疏』巻一七・月令第六）と註し、季秋九月に天子が自ら天の五帝を大饗（＝嘗）し、有司が犧牲を以て群神を饗応（＝嘗）し、その後は祭礼の成功を天子に告げるといい、孔疏はそれに従う。つまり、⑤の嘗は群神への饗応を意味し、宗廟に関わる嘗祭や薦新行事ではない。

要するに、月令に見る嘗は二つの意味がある。一つは、九月の有司による群神への嘗であり、もう一つは四・五・七・八・九・十二月に天子は麦・黍・稷・麻・稲・魚を寝廟に薦め、自らも嘗する宗廟の薦新行事である。

時祭については月令に記していないが、他の篇に秋の嘗祭はよく夏の禘祭とセットで宗廟祭祀を指し、内祭とも呼ばれる。『礼記』祭統第二十五に、

外祭則郊、社是也。内祭則大嘗・禘是也。夫大嘗・禘、昇二歌「清廟」一、下而管レ「象」、朱干玉戚以舞二「大武」一、八佾以舞二「大夏」一、此天子之楽也。

とあり、大嘗・（大）禘は諸侯の嘗祭・禘祭と対になる天子が行う嘗祭・禘祭を指し、特別な歌舞によって最上級の祭祀規格を示す。薦新行事の嘗は簡単な飲食供献であるのに対し、時祭の嘗祭は正式な宗廟祭祀として牲礼、饗尸の儀、楽舞の奉献[10]等を伴う。その性格について、「嘗者、新穀熟而嘗レ之」（『礼記注疏』巻一二所引の『白虎通』）というような解釈によって、収穫祭と思いがちである。しかし、薦新行事の嘗に用いる麦・黍・稷・麻・稲といった穀物も当時新しく成熟したもので、「新穀熟而嘗レ之」という解釈は秋の嘗祭だけでなく、各月の薦新行事にも適用し、それだけで嘗祭を収穫祭とすることはできない。嘗祭は新穀の収穫を祝うための祭祀ではなく、大切な新穀を以て祖先を饗応することこそが嘗祭の宗廟祭祀としての本義である。

日本では律令祭祀に繋がる大嘗は天武天皇二年（六七三）[11]に初見し、天武朝の「大嘗」は「大新嘗」の約で、尊称として「大」を受けたもので、天皇の行う新嘗を意味するとされている。[12]それ以前より皇太子以下の諸臣も新嘗儀礼を行っているが、[13]「大嘗」という語で臣下の新嘗と区別してきたのであろう。この共通した意味で、天皇の行う大嘗祭の名称は『礼記』における天

子の行う大嘗に由来すると考えられる。

以上、大嘗祭・新嘗祭の名称は『礼記』に由来することを確認した上、それは単なる文字の借用や秋の祭りとしての借用だけではないと考えられる。天子・天皇が新穀等を嘗する前にまず祖先・祖神に捧げる、臣下の新嘗に対して天子・天皇の新嘗は大嘗と称するといった共通的な理念から見れば、大嘗・新嘗の成立段階に中国宗廟祭祀の嘗祭や薦新行事の意義を根本的に意識していたと考えられる。

2、大嘗・新嘗の性格

中国の祖先祭祀では、天子から貴族・諸臣までは宗廟で、庶人は家の正寝で祖先を饗応することができる。[14] 大嘗祭・新嘗祭の原形は大化前代の新嘗儀礼に遡り、臣下、民間、地方でも行われ、[15] 中国と同じように祭祀権は限定されない。

天武朝に入ると、国郡卜定を伴う国家的な天皇の大嘗が始まり、持統天皇五年（六九一）に初めての践祚大嘗祭が行われる。[16] 平安時代になると、践祚大嘗祭と新嘗祭は祭祀内容がより明確になり（『儀式』『延喜式』等）、名称も法律的に分けて説明し始める（『延喜式』巻二・巻七）。毎年十一月の中卯または下卯の日、昼に神祇官で新嘗祭の班幣を行い、夜に常設の神嘉殿で天皇は大嘗祭の卯日神事と同様に神饌供進の儀を行う（或いは臣下が神祇官で代行する）。但し、新嘗祭に献る新穀は畿外から卜定された斎田で収穫した稲ではなく、令制以前の「倭屯田」の系譜を引いた畿内の官田で収穫した稲である。[17] 新嘗祭の前に、宮内省がその年の畿内官田の収穫量等を天皇に報告する儀式がある（『儀式』）ので、新嘗祭の国家公的な収穫祭の性格が指摘とされている。[18]

確かに律令祭祀の大嘗祭・新嘗祭は、新穀の稲や粟の収穫と緊密に関わり、収穫祭の性格は強く見える。しかしその原形、大化前代の新嘗儀礼は違う性格を示している。『日本書紀』によれば、用明天皇二年（五八七）四月の新嘗と舒明天皇十一年（六三九）正月の新嘗は、事情によって延引したという。しかし、一年中の最後の収穫期に間に合わなかったら、敢えて翌年の春に前年度の収穫祭を行う必要はあるかと思われ、当時新嘗の本義は新穀の収穫を祝うことではなかったと推測される。

それを裏付けているのは『常陸国風土記』筑波郡条の「新粟初嘗」の説話における祖神尊の来臨である。[19] 新粟を初嘗する夜に祖神尊を泊めなかった福慈神への呪詛と、祖神尊を泊めて飲食を奉った筑波神への祝福とは対比的なもので、自ら新穀を嘗する前に祖神を饗応すべきであることを示唆している。この理

念は正に大嘗祭・新嘗祭の中核であり、宗廟での嘗とも共通する。つまり、大化前代の新嘗が収穫の季節でなくても行われた理由は、祖先・祖神への饗応こそが祭祀の第一義であることにある。

律令期以降、天皇親祭の神今食は新嘗とほぼ同様な祭儀を持つ。しかし、神今食は、次の四点で新嘗祭とは異なる。①「旧穀を使い、六・十二月に斎行」、②「祭儀の前に天皇の向う半年間について御体御卜を行う」、③「祭儀の後に節会はない」、④「神饌の枚手の数は新嘗の半分になる」。更に、新嘗祭は収穫を祝う一年の報賽として性格を持つのに対し、神今食には半年の予祝的な要素が指摘されている[20]。「即如二庶人宅神祭一也」（『令集解』巻七）とあるように、神今食は天皇内々の氏神祭祀[21]として、祖神への饗応、祖神祭祀という新嘗の本義をより純粋に反映しており、このため、律令祭祀の新嘗祭が成立しても併存して行われていったのだろう。

以上、大嘗・新嘗の名称は『礼記』に記された「大嘗」（嘗祭）、「嘗新」（薦新行事）に由来し、祖神祭祀の性格を持つと論じてきた。従来大嘗祭・新嘗祭の名称の由来は秋の嘗祭に限って論じられているが、日中の嘗祭の斎行季節の違いや神今食の意義から考えれば、各月の薦新行事としての嘗を借用した可能性もあると考えられる。

二、宗廟祭祀と大嘗祭の祭儀比較

嘗祭の中核は神饌の供進・共食である。以下は献饌の儀を中心に日中の嘗祭の祭儀比較を試みたい。比較対象は『礼記』『周礼』『通典』等をもとに復元した周天子の宗廟祭祀[22]、『大唐開元礼』（以下『開元礼』）に記された皇帝の太廟での時享と、『儀式』『延喜式』『天仁大嘗会記』『大嘗会神饌秘記』『建保大祀神饌記』『伏見院宸記』等をもとに復元した大嘗祭にする。

1、宗廟祭祀

(1)、周天子の宗廟祭祀

宗廟祭祀の前、筮と亀卜で犠牲の吉凶や祭日を卜問する。祭日の十日前、七日間の散斎に入り、交合・音楽・弔問を止め、沐浴潔斎を行う。三日前、筮で尸（しかばね）（祖先を代表して饗応を受ける人）を立て、三日間の致斎に入り、祭祀のみに集中し精神を整え、儀礼の予習、宗廟の修理掃除、祭場付近の警蹕・守衛等を行う。また供物の粢盛（しせい）（穀物）は王の親耕で得たものを、祭服は后の親蚕で得た糸で作るものを使う。

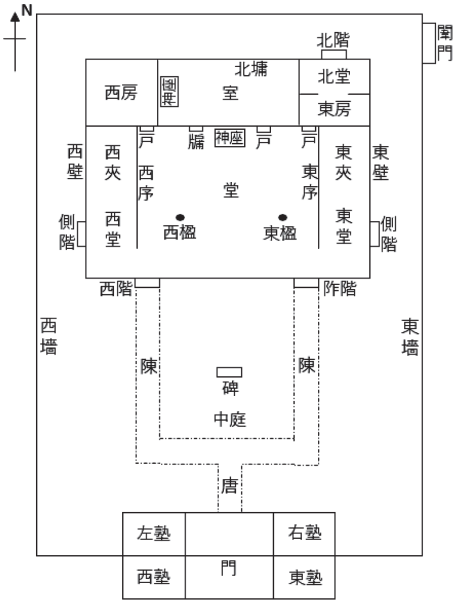

図１　宗廟図（『考工記図』をもとに）

①迎尸・降神・祼礼

祭日の早朝、予め祭器と供物を陳列し検査する。堂の戸・牖の間と、主（神主・廟主・木主ともいい、先祖の名を記した木製のもの）を納めた室の西壁の坎の下にそれぞれ神座（筵席と玉几）を設ける。また守祧（廟を守る職）が尸に先王の嘗て着ていた服を授けて着用させる。

祭祀の始まりに、王・后が器楽に合わせて廟に入り、ぞれぞれ東序・西序に立つ。「肆夏」の器楽が演奏され（金奏）、尸が廟の中に迎えられる（迎尸）。王が室に入り、后が西房に就き、瞽蒙（盲人の歌手）が堂に登り降神の歌を歌う（登歌）。

次に、尸が室に迎えられ、主と神座の北に就く。王・后と尸が手を洗い（沃盥）、鬱人（祼礼の酒器を掌る職）等が鬱鬯（鬱金香と黒黍で醸した酒）を入れる瓚を洗う（洗瓚）。

次に、音楽（下管）が演奏され、王・后が祼礼を行い、それぞれ尸に鬱鬯を捧げ、尸がそれを少し地に灌ぎ、一口嘗め、地上に置く。これは尸による求神の行為とされている。

②朝践の礼（堂事）

次に、王が肩脱いで廟門の外より牲を迎え、自ら牛牲を牽き（迎牲）、祝等が幣を執って随従する。廟に入ると、牲の肥満を称える祝辞がある。王が碑に牲を繋げ、大宰の助けで玉幣を

献じ、牲の血・毛を取り祝に授け、祝が室に入り、神に献じ、牲の純善を告げる（薦血毛）。その後、王が弓矢で自ら牛牲を射、他の牲の屠殺は射人（射礼を掌る職）等によって完成する（殺牲）。その後、内饔（宮中の御膳を掌る職）等が牲体を切断する（割牲）。

迎牲と同時に、祝が尸を堂へ迎え、尸は戸・牖の間に着き南面し、主はその西に移動し東面させる。后以下が音楽に合わせて、朝事籩豆（野菜、肉醤等）を尸・主の前に献じる。

次に、祝が肝膋（牲の腸の間の脂肪）を蕭・黍稷と合わせて炉炭で燃やし、室に持ち込み、祝文を申し、また堂を出てそれを主の前に供える。同時に王が堂上で鬱鬯の中に肝を洗い、焼き、主の前で破る（制祭）。

次に、祝が室の北墉の下に牲首を供え陽気を報い（昇首）、また堂上で尸と主の前に牲の血・肉を献じる（薦血腥）。

次に、王が初献（祼礼）の如く尸に三献し、后が四献する。内饔等が再び牲体を割き、牲肉を烹始める。

③饋食の礼（室事）

次に、堂上の神座を更新し東面させ（変几）、東堂に置いた神饌を尸・主の神座の前に供える。祝が酒を入れた斝（温酒器）を神饌の南に供える（天子奠斝[23]）。

次に、祝が尸・主を室へ迎え、尸が斝を挙げて祭ろうとする時、王が尸に拝礼し神座に安坐させる。尸が菁茅を以て酒粕を濾過し（縮酒）、斝の中の酒を少しずつ地に灌ぎ、自ら一口嘗め、地上に置き（奠斝）、主の北側に着座する。

次に、王が五献し、后が饋食籩豆（果物、漬物、肉醤等）を献じ、六献する。献酒の後に焼き肉も献じる（献燔）。牲肉が半熟になると、鼎俎に入れて献じる（薦爓）。

次に、后以下が炊き上がった粢盛を尸に献じる。牲肉を十分加熱した後、鼎俎に入れて献じる（薦熟）。尸が食前に食祭（少しの食物を振ったり隣に置くことで先人を祭る）を行い、御飯と牲肉を十一口食べ（尸飯）、満腹を告げると、大祝（祝官の長）が尸に続けて食べようと勧める（侑）。

次に、王が七献し、尸に酒で口を漱がせる（酳尸）。尸がそれを飲み、祝に爵を授け、祝が清酒を酌み尸に返す。尸がそれで王に返杯し（酢）、王が酢席に着き、爵を受ける。尸が黍稷の神饌を少し祭り、王に祝福の嘏辞を贈る。王が出て量人（丈量等を掌る職）と鬱人に爵を授ける。

次に、后が八献し、尸が同じく后に酢い、后が加籩加豆（果物、漬物、干し肉、肉醤、牲肉等）を献じる。

次に、賓としての諸侯が九献し、尸が諸侯・諸臣に酢い、世

婦（女官）が羞籩羞豆（穀物で作った食品）を献じる。

次に、王が庭上に降り、群臣を率いて楽舞を献じる（合楽）。

次に、尸が嗣子、諸臣と相互に献酒する（旅酬）。王が助祭者等に賜酒する。

④献饌の後

献饌が終わり、肆師（習礼等を掌る職）が祭祀の成功を告げる。「肆夏」の器楽が演奏され、尸が廟門の外に送られる（送尸）。その後、嗣子が尸の食べ残しを少し頂く（餕食）。后以下が歌舞に合わせて、俎、籩豆等を撤下する（徹）。守祧が尸の食べ残しを宗廟の西階の東に埋め、尸の祭服を収める。

一日の宗廟祭祀はこれで終わり、主祭者（王）が助祭者（諸侯等）や尸、親族を招待する宴会（燕饗）がある。

翌日の明け方、廟門の傍らで再び神を求め索祭（繹祭）を行い、廟門外の西塾で神饌を供え、その後、堂で尸を饗応する（賓尸）。

(2)、唐の太廟祭祀における献饌の儀

『礼記』『周礼』の断片的な記述や後世の『通典』で周天子の宗廟祭祀の祭儀を復元してみたが、次第について定説のない所が多いため、秦漢以来の礼制を集大成した礼典、唐の『開元礼』[24]を参考したい。唐の皇帝の太廟祭祀は周天子の宗廟祭祀と比べて、祭祀の前の斎戒の期間と内容、祭祀の中の楽舞の名称、祭祀の後の五祀等の相違点があるが、紙幅の都合上、それらの考察を省略し、中心的な献饌の儀に注目したい。以下は例として『開元礼』巻三七・皇帝時享於太廟の中の晨祼・饋食条の内容を要約する。

①晨祼

太廟令等、明水・五斉・鬱鬯を尊等に入れ、籩豆・簠簋（ほき）に神饌を盛る。

太祝等、各室から九廟の神主を出し、室内の神座に置く。

皇帝、廟に入り、版位に就き西向きに立ち再拝する。

皇帝、再拝し、沃盥・洗瓚し、鬱鬯を酌む。

皇帝、廟毎にその神座の前に跪いて祼礼を行い、再拝する。

太祝、毛血・肝膋を神座の前に献じ、室の外で炉炭で蕭・黍稷・肝膋を焼く。

②饋食

祝史、毛血を撤し、俎・簠簋（ほき）を献じる。

皇帝、沃盥・洗爵し、醴斉（れいせい）（無濾過の酒）を酌み、献祖の神座の前に少し東向きで跪いて爵を地上に置き、室を出る。また少し西向きで同じく献酒する。

太祝、室の外で跪いて祝文を奏上し、終わったら祝版を神座

の前に供える。皇帝、二度再拝する。また献祖の儀の如く他の八廟に献酒・祝文奏上・拝礼を行う。

太祝、上尊福酒を皇帝に進める。皇帝、再拝して受け、跪いて酒を祭り、一口嘗め、地上に置く（飲福）。

太祝、神前に供えられた三牲の胙肉と黍稷の御飯を皇帝に進める。皇帝、それを受けて左右に授ける。

皇帝、跪いて爵を取って酒を飲んだ後、太祝に授け、再拝する。

太尉、沃盥・洗爵し、九廟の神主に献酒し（亜献）、福酒を飲む（飲福）。

光禄卿、亜献の如く終献し、飲福する。

太祝、籩豆を撤する。

諸官に牲肉を賜わり（賜胙）、飲福者以外の諸官が再拝する。

皇帝、廟門を出る。諸官、再拝し退出する。太祝等、神主を収め、祝版を焼く。

皇帝時享於太廟に記した献饌の儀は基本的に『礼記』『周礼』の内容に従い、金奏登歌、沃盥・洗瓚、祼礼、献酒、献饌、文舞・武舞等の要素は共通的に見え、次第も大体同じである。周制との相違点として、唐制では尸と皇后の参与がなく、その代わりに神主が直接の祭祀対象となり、太尉が亜献、光禄卿が終献する。尸が神を代表して神饌を食べることができなくなったため、尸飯（しはん）、侑尸（ゆうし）、酳尸（いんし）等の作法も当然なくなる。また『礼記』『周礼』に天子の宗廟祭祀に奏上する祝辞の内容が記されていないのに対し、『開元礼』に太廟祭祀の祝文が明確に記載され、例文としての献祖の儀の祝文を挙げる。

維某年歳次月朔日、子孝曾孫開元神武皇帝諱、敢昭告二於献祖宣皇帝、祖妣荘宣皇后張氏一、気序流邁、時惟孟春〈孟夏孟秋孟冬〉、永懐二罔極一、伏増二遠感一、謹以二一元大武、柔毛、剛鬣、明粢、薌合、薌萁、嘉蔬、嘉薦、醴斉一、敬修二時享一、以申二追慕一。尚饗。

その祝文に祭祀時間、祭祀者、祭祀対象、供物、また祖先への追悼の意、祭祀の目的が述べられている。このような構成は『儀礼』少牢饋食礼に見た卿・大夫の宗廟祭祀における祝辞[25]と共通する。

2、大嘗祭

大嘗祭の諸儀について、近年岡田荘司氏（『大嘗祭と古代の祭祀』吉川弘文館、二〇一九）や安江和宣氏（『大嘗祭神饌御供進儀の研究』神社新報社、二〇一九）等の復元考察が詳しいので、贅言を要せず、表1において概略的に見る。その中、中

表 1　大嘗祭の流れ

日時		行事
十一月中卯日または下卯日以前	四月	斎国斎郡等の卜定
	八・九月	大祓使・天神地祇奉幣使・由加物使・神服使・抜穂使の発遣
	十月	御禊行幸、朱雀門前大祓
	十一月朔日	一ヵ月の散斎開始
	祭日の七日前	朝堂院で大嘗祭の造営開始
	祭日の三日前	大嘗祭の造営完了、三日の致斎開始
	寅日	宮内省で天皇の鎮魂祭
中卯日または下卯日	朝	神祇官で班幣 大嘗宮正殿で神座設置、大嘗宮周囲で警衛
	巳時	悠紀院の臼屋・膳屋で神饌調理
	戌時	天皇が廻立殿で小忌御湯、その後悠紀殿の堂で待機
	亥時一刻	天皇が室に入り、神饌行立 天皇が室で神饌供進・共食（御手水・御祈請・御親供・御直会） 宮主が堂で祝詞奏上
	亥時四刻	采女が室で撤饌・祝詞奏上、再び御手水
	子時	主基院の臼屋・膳屋で主基の神饌調理、再び廻立殿の儀
辰日	寅時一刻	再び神饌供進・共食（悠紀の如し）
	卯時一刻	天皇が還御
	卯時二刻	大嘗宮の壊却
	辰時二刻	豊楽院で中臣寿詞奏上、神璽鏡剣奉上、悠紀の御膳、賜饌
	酉時	悠紀国に賜禄
巳日		豊楽院で主基の御膳、賜饌、主基国に賜禄 清暑堂で琴歌神宴
午日		豊楽院で宣命、叙位、大饗、歌舞奉献、賜饌、賜禄 宮内省で小斎公卿の解斎
未日		神祇官等に賜禄
晦日		朱雀門前大祓
十二月上旬		斎国で解斎・解除

心的な天皇による御祈請・御親供・御直会に注目すると、以下の次第が見られる。

まず、天皇が御祈請の御言葉を申し、その内容は『後鳥羽院宸記』に、

坐二伊勢五十鈴河上一天照大神又天神地祇諸神明白。朕因二皇神之広護一、国中平安、年穀豊稔、覆寿二上下一、救済二諸民一。仍奉レ供二今年新所レ得新飯一如レ此。又於朕躬、攘除二可レ犯諸災難於未萌一、不祥悪事遂莫二犯来一。又於高山深谷所々社々大海小川而記レ名厭祭者、皆尽銷滅而已。

とあり、祭祀対象と祭祀者を明記し、神恩感謝と共に新穀の神饌を供えることを報告し、また天皇の身体に災禍が起こらないように祈る。

次に、陪膳采女が神食薦を短帖の神座の南西側に敷き、御食薦を短帖の北西側に敷き、箸筥、枚手筥、各種の神饌の筥を御食薦に供える。

次に、天皇が陪膳采女の助けで神饌を御親供し、陪膳采女が枚手一枚を天皇に奉り、天皇が神饌三箸を盛り陪膳采女に授け、陪膳采女がそれを神食薦に供える。この如く御飯（稲・粟）の枚手十枚、御菜（生物の鯛・鮑・雑魚・醤鮒、干物の蒸鮑・干鯛・堅魚・干鯵、それに陪膳采女が加える鮝汁漬・海藻汁漬）の枚手十枚、果物（干棗・搗栗・生栗・干柿）の枚手十二枚を供える。また、陪膳采女が平居瓶に入れた御酒を本柏に注ぎ、天皇に奉る。天皇がそれを供えられた枚手の上に振り注ぐ。この如く白酒・黒酒を二度ずつ注ぎ、度毎に平居瓶と本柏を変える。

次に、天皇が御直会し、三度拍手して称唯し稲の御飯を三箸召し上がり、また同様に粟の御飯を三箸、黒酒・白酒を四度ずつ召し上がる。

3、宗廟祭祀と大嘗祭の異同

一年数回の天子宗廟祭祀と一代一度の大嘗祭とは規模の差があるが、祭祀構造上に祭器・供物の準備、卜占、斎戒、祭祀施設の整備・警備、神饌の調理・供進・共食・撤下、楽舞、饗宴という共通的な流れがあり、献饌の儀において、共に沃盥・祝文・供膳・共食・撤饌といった要素がある。

祝文について、唐の太廟祭祀の祝文は太祝によって奏上され、主に祭祀者、祭祀対象、供物、祭祀の主旨といった情報を伝えるもので、特に祈りや感謝の言葉が見えず、『儀礼』のそれも同じである。その理由について、まず時祭のような常祀では祈祷の必要はなく、また三礼（『周礼』『礼記』『儀礼』）の段階で

は饗応を受けた尸が祭祀者へ祝福の言葉を贈ることがあり、直接神の祝福を得るので祈りの言葉は要らなくなる。後世に尸が消えたが、その祝文の形式が受け継がれていると推測される。一方、平安時代後期以降の史料に見る、大嘗祭における天皇自ら奏上する御祈請の御言葉には祭祀者、祭祀対象、供物、祭祀の主旨の他に、災害を未然に防ぎ、天皇の身体の安穏を祈る内容がある。岡田荘司氏は「神と自然の恵みへ感謝する天皇一代一度の大嘗祭には、災害への対応も祭祀の本義に組み込まれており、二つの祈念を主眼とした」と指摘している。[26]

供膳・共食について、宗廟祭祀と大嘗祭に供えた飲食物に共に穀物、果物、海産物、酒があり、天子・天皇が自ら供膳または献酒を行い、神に供える飲食物を頂き、最後に祭祀関係者にも酒食を賜る。しかし、供膳の時間について、三礼に朝から夕べまでとするのに対し、大嘗祭は深夜から翌日の未明まで行う。前述した「新粟初嘗」の説話にも新嘗を夜の行事とし、日本古来の祭祀観だと思われるが、中国では中原国家に見えない夜祭りは荊楚地方（「九歌」「離騒」等）に見え、[27] 弥生時代初期において稲作技術の流入と共に、『楚辞』に示した中国南方の祭祀伝統が日本の神観・祭祀観に影響を与えた可能性も考えられる。また、宗廟祭祀では穀物の他に家畜・家禽の供犠があるのに対し、大嘗祭では供犠はせず、新穀の他に海産物が多用される。その神饌の原形は纏向遺跡の中心部の祭祀土坑に見られ、そこに出土した土器と海水魚の骨は伊勢湾沿岸と結びついた祭祀の伝統は、後の大嘗祭と神宮祭祀との関わりにも窺える。[28]

また、宗廟祭祀と大嘗祭に共に明水・明火を使う。『周礼』秋官・司烜氏に「司烜氏、掌下以二夫遂一取二明火於日一、以レ鑑取二明水於月一、以共二祭祀之明粢・明燭一、共中明水上。凡邦之大事、共二墳燭・庭燎一」とあり、天子の祭祀の際、陽燧で火を作り、明火として松明や庭燎を点け、銅鑑で露を集め、明水として祭祀用の穀物を洗い、また玄酒として供えるという。『開元礼』に「火以供レ爨」とあるように、明火は神饌の調理にも使う。大嘗祭に斎火で悠紀・主基院の燈・燎を灯し、忌火で御飯を炊き神饌を調理することは中国祭祀と共通する。明水に関して、『太常因革礼』巻一三・五斉三酒に「或陰鑑方諸之類難レ為二猝辦一、則如二唐制一、以二井水一代レ之、更俟二它時一、訪求二式法一」とあるように、月から水を取ることは突然用意し難いので、唐宋では井水で明水を代用していたという。[29] 一方、「中臣寿詞」に「皇御孫尊乃御膳都水渡、宇都志国乃水部天都水遠立奉牟止申遠里」「自二其下一天乃八井出牟。此遠持天天都水止所レ聞食」とあり、天皇の御膳

には天の八井から取られた特別な「天つ水」が用いられるという。その「御饌つ水」「天つ水」は、卜定されて掘られた北野斎場の御井・童女井の水に当たり、大嘗祭の御膳・御酒と直接関係すると指摘され[30]、井水の明水・玄酒の性格と共通する。

献饌を行う場所について、天子の宗廟は王城内の東南に立ち、「宗廟、外為二都宮一、内各有二寢廟一、別有二門垣一」（『元史』巻七五・祭祀四所引の晋・孫毓の論）というように区画・遮蔽された施設であり、大嘗宮は朝堂院に仮設し、宮垣で遮蔽され、中に屏籬・中籬等で悠紀・主基院を区画する施設である。つまり、宗廟祭祀と大嘗祭は共に宮城内に区画・遮蔽された施設で行われ、「内祭」の性格を持つ。特に献饌を行う悠紀・主基殿と廟は堂室構造の建築物であり、その中に神座を設けることは共通する。神座の設置は神がその場にいるが如く祭祀を行うためであり、宗廟祭祀と大嘗祭だけでなく、古代日中における自然景観での祭祀等にも共通的に見られる。しかし、相違点は尸や神主等神の見立てと降神儀礼の有無である。

古代中国の祭祀では依神（神に憑依してもらう）のために神主或いは束帛と、神座を設け[31]、また生きている人間が務める尸を立てて祭祀対象を代表して饗応を受けさせ[32]、また祭祀の始まりに金奏登歌の音楽と祼礼で降神を行う。神を顕在化するための重層的な手段は「祭如レ在、祭レ神如二神在一」（『論語』八佾第三）という祭祀観を徹底するためではあるが、「不レ知二神之所一レ在」（『礼記』郊特牲第十一）「豈知二神之所一レ饗」（『礼記』檀弓下第四）というような不確かな神観も示唆している。神主・神座の設置と降神の儀礼は、『開元礼』に見えるように後世に受け継がれているが、立尸の伝統は秦漢以降の中原では消えた[33]。栗原朋信は秦漢の上円下方の人形木主が尸の「かたしろ」の役割に取って代わったとされる[34]。しかし、尸は生きている人間として言動することができ、神饌を食べて飽きたり酔っぱらいになったりする表情を見せることができ[35]、物の神主や神座との根本的な区別があり、神主形式の変容で取られる役割ではないと考えられる。私見では春秋戦国時代において長期の動乱が礼制の崩壊を齎し、それに伴い神観の変化や祭祀儀礼の簡略化が起こり、やがて複雑な饗尸の儀式が消えたと推測される[36]。古代日本の祭祀に尸を立てたり、神主を設けたり、降神を行ったりする事例は史料に見えないが、神座を設けるのが一般的である。それは神の居場所やあり方に対する古代日中の神観・祭祀観の相違に関わる問題でもあり、今後は自然祭祀・祖先祭祀という二形態の祭祀実態に基づいて検討したい。

前節では大嘗・新嘗の名称は宗廟祭祀の嘗に由来することを指摘し、本節では大嘗祭と宗廟祭祀の共通的な祭祀構造を見た所、大嘗祭の成立過程における宗廟祭祀の影響の可能性を考えてみたい。四世紀から六世紀にかけて、記紀に記されたように中国や朝鮮半島から『論語』等の漢籍が伝来し、それを解読できる五経博士等も渡来した。その際に『礼記』『周礼』等の経典の影響で、中国の宗廟祭祀を意識して大嘗・新嘗の祭りは始めたと推測される。七世紀以降、日本は遣唐使の派遣によって律令制度をはじめ中国の文化・制度を直接に導入し、その際に『開元礼』のような礼典を齎し、大嘗祭はその影響の下で律令祭祀として成立し、また次第に『儀式』に記された祭儀のように整えられていったと考えられる。

とはいえ、伊勢の神宮祭祀と連動しながら皇祖神のみを祀り[37]、斎国卜定等で全国を取り組み、供犠はしない等の大嘗祭の独自性は、独立国としての日本で保つことができた。同時代の統一新羅は唐に臣従し、それ以前の始祖廟祭祀、神宮祭祀に取って代わり、諸侯国として直接中国の五廟制を導入した[38]。中国の宗廟制度に対して東アジア諸国は異なる受容形式を示し、その中に日本は何故大嘗祭の形式を取ったのか、中国の祭祀制度に対する取捨選択の根拠は何であったのか、といった問題が問われる。それは古代の神祇祭祀の形成、ひいては日本列島の文化形成に関わる問題でもあり、今後の課題としたい。

おわりに

本稿の要点は以下のように纏めることができる。

①『礼記』に「大嘗」（天子宗廟祭祀の嘗祭）と「嘗新」（宗廟の薦新行事）の表現があり、日本の大嘗・新嘗はその祖先祭祀の形式と意義を理解した上でその名称を借用している。

②宗廟祭祀と大嘗祭における献饌の儀は、宮城内に区画・遮蔽された、神座を設けた堂室構造の施設の中に、天子・天皇が祖先・祖神に神饌を捧げ自ら嘗するという共通的な形態を持つ。一方、大嘗祭は降神はしない等の特徴を持つ。

③古墳時代中後期に大嘗祭の原形は中国の宗廟祭祀の影響を受けて形成し、律令国家形成期に古来の祭祀伝統を保ちながら中国の祭祀制度に倣って、天皇家の祖神祭祀である大嘗祭は国家的な律令祭祀体系に組み入れられ、次第に祭儀を整えられていった。

本稿では古代日中の嘗祭をめぐり、大嘗祭を例として宗廟祭祀との比較を試みたが、紙幅の都合上、神宮の神嘗祭等に触れ

なかった。日中の嘗祭は祖先・祖神祭祀の性格を持つ一方、収穫との緊密な関係が否定し難く、今後は始祖神祭祀と農耕儀礼との関係の観点から研究を深めていきたい。

史料

飯田武郷『日本書紀通釋　第五』畝傍書房、一九四〇
景印文淵閣四庫全書經部禮類『儀禮注疏』臺灣商務印書館、一九八三
景印文淵閣四庫全書經部禮類『禮記注疏』臺灣商務印書館、一九八三
景印文淵閣四庫全書經部禮類『五禮通考』臺灣商務印書館、一九八四
景印文淵閣四庫全書史部政書類『通典』臺灣商務印書館、一九八四
景印文淵閣四庫全書史部政書類『大唐開元禮』臺灣商務印書館、一九八四
景印文淵閣四庫全書史部正史類『後漢書』臺灣商務印書館、一九八四
景印文淵閣四庫全書史部正史類『元史』臺灣商務印書館、一九八四
神道大系朝儀祭祀編五『践祚大嘗祭』神道大系編纂会、一九八五
王文錦・陳玉霞点校『周禮正義』中華書局、一九八七
金鶚撰『求古録禮説』山東友誼書社、一九九二
虎尾俊哉『延喜式　上』集英社、二〇〇〇
皇學館大学神道研究所編『訓讀註釋　儀式　踐祚大嘗祭儀』思文閣出版、二〇一二
粕谷興紀『延喜式祝詞（付）中臣寿詞』和泉書院、二〇一三
趙嫄・代坤編『考工記圖二巻』国家図書館出版社、二〇一五

（1）真弓常忠「稲作りの祭り」「大嘗と新嘗」『大嘗祭の世界』学生社、一九八九

（2）田中卓「奈良時代以前における〝新嘗〟と〝大嘗〟について」『大嘗祭の研究』皇學館大學出版部、一九七八
岡田莊司「天皇祭祀と国政機構」（初出一九九〇）『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会、一九九四

（3）池浩三「大嘗宮正殿の室・堂の性格—中国古代の宗廟形式との比較において—」『日本建築学会論文報告集』三〇八、一九八一

（4）丸山茂「平安時代の神嘉殿について：神事伝統の継承からみる常設神殿の一成立過程」『日本建築学会論文報告集』三二六、一九八三
丸山茂「古代廟建築についての一考察—唐代の廟形式より想像しうる日本建築への若干の影響について—」『建築史学』四、一九八五
丸山茂「倚廬・休廬・廬—建築様式からみた大嘗宮正殿の形成についての一試論—」『建築史学』六、一九八六

（5）『礼記注疏』巻一二・王制第五、鄭玄註「此蓋夏殷之祭名、周則改レ之、春曰レ祠、夏曰レ礿、以レ禘為二殷祭一」とあり、「礿・禘・嘗・烝」は殷以前の名称であり、周以降は「祠・礿・嘗・蒸」に変えたという。

（6）宗廟は前廟後寢の構造であり、『後漢書』巻九九・祭祀志下に「廟以蔵レ主、以四時祭。寢有二衣冠几杖象生之具一、以薦二新物一」とあるように、廟は時祭を行う場所で、寢は薦新行事を行う場所である。清・金鶚『求古録礼説』巻一一に「古者廟與レ寢同制、廟後又有レ寢、故廟亦寢廟、寢廟即廟也。宮本與レ廟別、而喪服伝有下築二宮廟一之文上、是廟亦曰二宮廟一、寢廟猶宮廟也」とあるように、ここの「寢廟」は即ち宗廟と見做してよい。

（7）『礼記注疏』巻三五・少儀第十七、鄭注「嘗、謂レ薦二新物於寢廟一。」

（8）『後漢書』巻九九・祭祀志下「光武帝建武二年正月、立二高廟於洛陽一。四時祫祀、高帝為二太祖一、文帝為二太宗一、武帝為二世宗一、如レ旧。余帝四時春以二正月一、夏以二四月一、秋以二七月一、冬以二十月及臘一、一歳五祀。」
また、『通典』巻四九によると、時祭を四孟月に行うことは北斉、唐

の時代にも明確されている。そして、同書所引の魏・高堂隆の論「按二旧典一、天子諸侯月有二祭事一、其孟、則四時之祭也。三牲、黍稷、時物咸備。其仲月・季月、皆薦新之祭也。大夫以上将レ之以レ羔、或加レ以レ犬而已。不レ備二三牲一也。士以レ豚。庶人則唯其時宜、魚雁可也。皆有二黍稷一」とあり、時祭と薦新の時間、供物の区別を示している。

(9)『礼記注疏』巻一二・王制第五、孔穎達疏「服虔注二桓公五年伝一云、『魯祭レ天以二孟月一、祭二宗廟一以二仲月一。』非二鄭義一也。既以二首時一祭、故薦用二仲月一。若天子諸侯礼尊、物熟則薦レ之、不レ限二孟仲季一、故『月令』孟夏薦レ麦、孟秋薦レ黍、季秋薦レ稲是也。大夫既薦以二仲月一、而服虔注二昭元年伝一、『祭、人君用二孟月一、人臣用二仲月一。』不レ同者、非二鄭義一也。南師解云、『祭以二首時一者、謂二大夫士一也。若得レ祭レ天者、祭レ天以二孟月一、祭二宗廟一以二仲月一。其禘祭、祫祭、時祭、亦用二孟月一、其余諸侯不レ得レ祭レ天者、大祭及時祭皆用二孟月一。』既無二明拠一、未レ知二孰是一、義得二両通一、故並存焉。」

(10)『礼記』祭義第二十四に「楽以迎レ来、哀以送レ往、故禘有レ楽而嘗無レ楽」とあるように、嘗祭に音楽はないと記されているが、『大唐開元礼』から見ると、後世の太廟の時祭の斎行において、嘗祭にも音楽があった可能性があると推測される。

(11)『日本書紀』天武天皇二年十二月丙戌条「侍二奉大嘗一中臣忌部及神官人等、并播磨丹波二国郡司、亦以下人夫等悉賜レ禄。因以郡司等各賜二爵一級一。」

(12) 岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗」（初出一九六二）『古代王権の祭祀と神話』塙書房、一九七〇

(13)『日本書紀』皇極天皇元年（六四二）十一月丁卯条「天皇御二新嘗一。是日皇太子大臣各自新嘗。」

(14)『礼記』王制第五「天子七廟、三昭三穆、与二太祖之廟一而七。諸侯五廟、二昭二穆、与二太祖之廟一而五。大夫三廟、一昭一穆、与二太祖之廟一而三。士一廟。庶人祭二於寢一。」

(15) 岡田荘司「大嘗・新嘗の祖型―倭の屯田を訪ねて―」（初出一九八九）『大嘗祭と古代の祭祀』吉川弘文館、二〇一九

(16) 岡田荘司「大嘗祭」『事典　古代の祭祀と年中行事』吉川弘文館、二〇一九

(17) 同上

(18) 木村大樹「新嘗祭」註16前掲書

(19) 笹生衛「黄泉の国と祖の継承」『神と死者の考古学　古代のまつりと信仰』吉川弘文館、二〇一六

(20) 岡田荘司「天皇祭祀と国制機構―神今食と新嘗祭・大嘗祭―」（初出一九九〇）註15前掲書

(21) 註20前掲論文

藤森馨「神宮祭祀と天皇祭祀」（初出一九九〇）『古代の天皇祭祀と神宮祭祀』吉川弘文館、二〇一七

(22) 周天子の宗廟祭祀について張雁勇氏の博士学位論文『「周礼」天子宗廟祭祀研究』（吉林大学、二〇一六）に復元した内容を一部参考する。

(23) 尸が室に入る時機について、唐初期の賈公彦『周礼注疏』は六献以後、唐中期の杜佑『通典』は一回目の奠爵の後、清の孫詒譲『周礼正義』は四献以後として諸説があり、本稿では『通典』に従う。

(24) 趙瀾「『大唐開元礼』初探――論唐代礼制的演化歴程」『復旦学報（社会科学版）』一九九四年第五期、一九九四

(25)『儀礼』少牢饋食礼「孝孫某、敢用二柔毛、剛鬣、嘉薦、普淖一、用薦二歳事于皇祖伯某一、以二某妃一配二某氏一。尚饗。」

(26) 岡田荘司「稲と粟の祭り―大嘗祭と新嘗―」（初出二〇一八）、「古代神祇祭祀の体系と大嘗祭」（初出二〇一七）註15前掲書

(27) 黄霊庚「出土文献与当下的《楚辞》研究」『雲夢学刊』二〇一六年第三期、二〇一六

(28) 笹生衛「大嘗祭の意味と起源—大嘗宮から考える祭祀の意味と神宮との関係—」『瑞垣』二四五、二〇二〇

(29) 江川式部「唐朝祭祀における玄酒と明水—『大唐開元礼』の記載とその背景—」『駿台史学』一一三、二〇〇一

(30) 笹生衛「『中臣寿詞』の『天つ水』再考—『水の祭儀』論の再検討—」『国学院雑誌』第一二〇巻第十一号、國學院大學、二〇一九

(31) 『通典』巻四八「『五経異義』曰、『主者、神象也。孝子、既葬、心無レ所レ依、所二以虞而立レ主以事レ之。唯天子諸侯有レ主、卿大夫無レ主、尊卑之差也。卿大夫無レ主者、依レ神以二几筵一、故少牢之祭、但有レ尸、無レ主（中略）』後漢許慎五経異義、『或曰、卿大夫士有レ主不。答曰、按二公羊説一、卿大夫非二有土之君一、不レ得三祫享二昭穆一、故無レ主。大夫束帛依レ神、士結レ茅為レ**菆**。』」とあり、国土を持つ国君は神主を持つのに対し、国土を持たない卿・大夫は束帛で、士は筵の神座だけで依神するという。

(32) 三礼の段階では、尸を設けずに飲食物のみを供える儀礼（薦・奠・厭）は正式的な祭祀とは見做されない。

(33) 『五礼通考』巻六二「自レ周以前、天地宗廟社稷一切祭享凡皆立レ尸、秦漢以降、中華則無矣。」

(34) 栗原朋信「木主考（試論）」中国古代史研究会編『中国古代史研究第二』所収、吉川弘文館、一九六五

(35) 『通典』巻四八所引の『白虎通』「祭所二以有一レ尸者、鬼神聴レ之無レ声、視レ之無レ形、昇レ自二阼階一、仰視二榱桷一、俯視二几筵一、其器存、其人亡、虚無寂寞、思慕哀傷、無レ所二写洩一、故座レ尸而食レ之、毀二損其饌一、欣然若親之飽、尸醉若二神之醉一矣。」

(36) 『通典』巻四九に「其月朔薦及臘薦、薦新、皆奠、無レ尸。故群廟皆一朝之間盡畢」とあるように、薦新行事では尸を設けずに飲食物を奠えるだけなので、全ての廟への供献は朝のうちに完成できる。一方、尸を設ける正式な宗廟祭祀では、「質明而始二行事一、晏朝而退」（『礼記』礼器第十）というように一日が掛かるのが普通であり、また「季氏祭、逮闇而祭、日不レ足、継レ之以レ燭」（同上）というように、一日の未明から祭祀を始めるとしても、時間が足りず、夜まで続ける場合がある。廟毎に尸を饗応するのが非常に時間・費用・労力が掛かることであり、動乱の世になるとそれを徹底することが難しくなると考えられる。

(37) 岡田荘司「天武朝前期における新嘗祭祀」（初出二〇一八）註15前掲書

(38) 米田雄介「三国史記に見える新羅の五廟制」横田健一先生古稀記念会編『日本書紀研究　十五』所収、塙書房、一九八七